

キーワード

「9歳の壁」、日本語指導、認知特性、生活言語、学習言語、手話、日本語、助詞、授受構文、敬語、視覚優位型、同時処理型

研究概要

聴覚障害教育における日本語指導や教科指導の在り方

「9歳の壁」の存在は、聾教育現場で指摘されてきたが、非障害児にもみられる現象である。これは、「生活言語」から「学習言語」への移行につまずく現象であり、抽象的思考が求められる。

手話に対する理解が広がったが、手話の保障は、高いレベルの日本語の力や学力の獲得に直結しない。手話と日本語の「二言語教育」を考えるにあたって、「学習言語」レベルの日本語の獲得のためには、大量の日本語に接する必要がある、そのためには、口話の使用も無理のない範囲で必要である。意味を伝える視覚的言語・手段と日本語を伝える視覚的言語・手段の両方を検討する必要がある。

一方、補聴器や人工内耳の進歩により、「生活言語」レベルの日本語の獲得に成功したかのように見えても「学習言語」レベルの日本語の獲得が難しい例が、今なお多くみられる。

最近、発達検査によって聴覚障害児には「視覚優位型」や「同時処理型」が多いことが明らかにされているが、聴覚障害教育に携わる教員には、この認知特性を考慮に入れた指導もできる力も必要であろう。

聴覚障害教育現場では、依然として助詞獲得の難しさや長文読解の弱さが指摘されているが、聴覚障害児に多い認知特性とも絡めた実態把握と分析、日本語指導法や教科指導法の詳細な検討が求められよう。

応用例・用途

日本語指導法や教科指導法の開発

微妙な日本語の手話表現（手話と日本語の間の距離を明らかにし、今後の手話通訳の在り方を検討する）

小学校高学年以上を対象とする助詞検定問題の作成（ネット公開予定）

認知特性を考慮に入れた指導例の収集（視覚優位型・同時処理型の非障害児にも効果的であろう）

